

なばなとして利用できるなたね新品種「菜々みどり」

加藤晶子・由比真美子・山守 誠

(東北農業研究センター)

A New Rape Cultivar "Nanamidori" Available for Vegetable

Masako KATO, Mamiko YUI and Makoto YAMAMORI

(National Agricultural Research Center for Tohoku Region)

1 はじめに

なたねは搾油用として子実が利用される他に、早春に花茎及び葉を収穫し、“ナバナ”、“くきたち”などと呼ばれる野菜としても出荷・利用される。青森県では搾油用なたねとして無エルシン酸品種「キザキノなたね」を栽培する一方、ナバナ用(野菜用)にはエルシン酸を含む「カミキタなたね」を利用しているため、「キザキノなたね」にエルシン酸生成形質が混入することが危惧されている。このため、同県では、無エルシン酸で越冬性などの栽培特性が優れる野菜用品種の育成が要望されていた。「菜々みどり」は搾油用として育成された無エルシン酸品種であり、越冬後の草姿が良いためナバナとしての利用も期待されている。そこで本品種の特性について報告する。「菜々みどり」は2000年12月に種苗法に基く品種登録を出願した。

2 育成経過

本品種は、1989年5月に東北農業研究センター(盛岡試験地)において、無エルシン酸で耐寒雪性に優れ、多収ななたね品種の育成を目的として「東北84号(のちのキザキノなたね)」を母とし、「カミキタなたね」を父とする組合せにより、選抜育成されたものである。1994年から生産力検定予備試験、系統適応性検定試験、特性検定試験に供試した結果、成績が良好であったので、1996年よりなたね「東北89号」の系統名を付して生産力検定試験、青森県畑作園芸試験場における奨励品種決定基本調査、鹿児島県農試大隅支場における特性検定試験(耐病性)に供してきた系統である。また、野菜(ナバナ)としての利用性が期待されたので、1998年よりナバナ系統適応性検定試験、ナバナ特性検定試験、ナバナ生産

力検定試験に供試し、地域適応性や耐病性を検討してきた。1999年における世代は雑種10代である。

3 特性概要

(1) 形態的特性

なたねとしての草型は“Ⅲ”で、草丈は「キザキノなたね」並の“長”で、第1次分枝数は「キザキノなたね」より多い“中の少”である(表1)。葉は“楕円形”で葉の欠刻は“深い”、葉及び茎・莢のアントシアンは“無く”、根の肥大も“無い”。花色は“黄色”である。穂長は“中の長”で「キザキノなたね」よりやや短い。「キザキノなたね」と比べて1穂莢数は少なく“多”で、莢長と着莢密度は同程度でそれぞれ“中の短”及び“中”、1莢結実数は少ない“少”である。粒色は“灰黒”で、粒は「キザキノなたね」よりやや小さく、揃っている。ナバナとして花茎の色は“緑の濃緑”で、着色はなく、太さは“太い”。側花蕾の大きさは“中”である。

(2) 生態的特性

春播性程度は3で、「キザキノなたね」並の“低”である。抽苔期と成熟期は「キザキノなたね」並の“中の晩”であるが、開花期はやや遅い“晩”で、中晩生種である。露地栽培における野菜(ナバナ)としての収穫期間(収穫始期～収穫終期)は「かぶれ菜」より1週間程度早く、「カミキタなたね」並である。ナバナとしての抽苔性は“中の晩”で抽苔の草姿は“開”である。

耐倒伏性及び寒雪害抵抗性は「キザキノなたね」並の“強”である。菌核病抵抗性は“強”で、「キザキノなたね」よりはやや強いが、根こぶ病には罹病性で、「かぶれ菜」よりやや弱い(表1)。

なたねの子実収量性は育成地では「キザキノなたね」に劣るが、青森県では同程度である。「キザキノなたね」

より千粒重はやや軽い、外観品質は同程度である(表2)。露地栽培で株ごと収穫する利用形態のナバナ収量(調製重)は「かぶれ菜」及び「カミキタナタネ」と同等かやや多収である(表3)。

(3) 品質的特性

ナタネ子実の含油率は“中”である。「キザキノナタネ」と同じくエルシン酸は“無”である。グルコシノレート含量は“多”で、「キザキノナタネ」並である(表2)。

ナバナの収穫調製後の一本重は「かぶれ菜」及び「カミキタナタネ」に比べて重く、茎径が太い。食味の総合評価は「かぶれ菜」並かやや劣り、「カミキタナタネ」並である(表3)。

4 ま と め

「菜々みどり」は搾油用として育成され、耐雪性や菌核病抵抗性に優れる。しかし、「キザキノナタネ」に比べて子実収量は少なく、油分含量は低い。一方、ナバナとしては、越冬性が安定し、収量性が高く、一本重が重く、荷姿や食味が良好である。

栽培上の留意点は、以下の5点である。①ナタネと交雑可能なアブラナ科植物と充分距離を離して栽培する。②種子は無エルシン酸が維持されていることを確認して使用する。③越冬前の生育量を充分確保するために、適期播種を励行する。④過度の密植、多肥栽培は倒伏や菌核病の発生を招く恐れがあるので避ける。⑤根こぶ病に抵抗性がないので、連作や発生地での栽培を避ける。

表1 育成地における「菜々みどり」の栽培特性

草型	抽苔期 (月日)	開花期 (月日)	成熟期 (月日)	越冬株率 (%)	草丈 (cm)	第1次分枝数 (本)	1穂莢数 (莢)	穂長 (cm)	菌核病 抵抗性	耐倒伏性	寒雪害 抵抗性
菜々みどり	Ⅲ 4. 21	5. 6	7. 2	97	150	8. 5	54	51	強	強	強
キザキノナタネ	Ⅲ 4. 20	5. 3	7. 2	97	146	7. 0	61	54	強	強	強

備考:1996～1999年の平均値。

表2 育成地における「菜々みどり」の収量及び品質調査成績

	子実重 (kg/a)	対標準比 (%)	リットル重 (g)	千粒重 (g)	穂発芽 程度	粒大 整否	粒の 外観品質	含油率 (%)	エルシン酸含量 (%)
菜々みどり	27. 3	81	680	4. 0	微	やや整	中上～中中	37. 4	0. 0
キザキノナタネ	33. 5	100	676	4. 3	無～微	整	中上	42. 9	0. 0

備考:1996～1999年の平均値。但し、含油率は1998～1999年、エルシン酸含量は1997～1998年の平均値

表3 育成地における「菜々みどり」のナバナとしての主要特性

	菜々みどり	かぶれ菜	カミキタナ
抽苔期(月日)	4. 21	4. 26	4. 20
収穫期間(月日)	4. 22～4. 25	4. 28～5. 1	4. 22～4. 25
調整重(kg/a)	99. 2	99. 8	78. 3
対標準比(%):かぶれ菜	99	100	78
対標準比(%):カミキタナ	127	127	100
収穫本数(本/a)	3, 025	3, 858	3, 072
一本重(g)	31. 0	25. 9	25. 5
茎径(mm)	16	12. 9	14. 5
品質・食味総合評価	中	中	中

備考:1998～1999年の平均値